

# ある むぜお

府中市郷土の森博物館だより

al museo

2023年6月20日

# No.144



府中市本宿町遺跡の土偶 左から正面・横・背面（府中市教育委員会蔵）

## もくじ

- 1-2 [どんなもんだい？ 縄文時代](#)  
[その1…本宿町遺跡の土偶たち](#)
- 3 [最近の発掘調査](#)  
[謎の窪みをもつ古代道路遺構](#)
- 4-5 [NOTE](#)  
[行在所になった府中の大店](#)
- 6 [展示会案内](#)  
[特別展 どんなもんだい？ 縄文時代](#)
- 7 [展示会案内](#)  
[企画展 田村智久写真展](#)  
[花の森八景第2章 ヒカリトワ](#)
- 8 [series みち～道・路・通～](#)  
[①水の路が緑の道へ](#)
- 9 [令和4年度寄贈資料一覧](#)  
[利用状況 新刊案内](#)
- 10 [近代プラネタリウム誕生 100周年！](#)  
[プラネタリウムについて知ろう！](#)  
[①世界初の光学式プラネタリウムの誕生](#)

## どんなもんだい？ 縄文時代

じょうもん縄文時代は、今からおよそ16,000～2,300年前。調査・研究で明らかになっている当時のくらしとは、いかなるものでしょうか。そして、そこからどのような時代像が描けるでしょうか。府中市内でみつかった資料を入口に、その調査・研究の一端を4回シリーズでご紹介します。

### その1…本宿町遺跡の土偶たち

ほんしゆくちやう いせき本宿町遺跡は、JR南武線・なんぶ西府駅の周辺に広がる縄文時代の集落跡。およそ5,400～5,200年前のどろ土偶がまとまって出土しています。上の土偶は、どう胸部と右足が40m離れた場所で見つかりました（写真は接合した状態）。手指や腹部が細かく造形された逸品です。頭部や左足はみつかりません。高さはおよそ14cmです。

# どんなもんだい？ 縄文時代

## その1…本宿町遺跡の土偶たち

土偶は、一言で表現すると「人をかたどった縄文時代のやきもの」です。そのモデルや用途については決着がついていませんが、その根底に生命に対するいのりがあったことは確かでしょう。

人をかたどったと言いながら、全身像で見つけることが非常に少ないのが土偶の特徴のひとつ。この点が、土偶研究においても大きな論点となってきました。

破片で見つかるのは、縄文時代の人びとが何らかの目的でわざと土偶を壊したからだとする考えがあります。実際、本宿町遺跡でも頭・胴・足といった部分的な発見が多くを占めています。表紙でご紹介した土偶のように、離れた場所からみつかった破片がくっついて、元はひとつの土偶だったとわかることもあります。すべての事例がそうというわけではありませんが、壊された土偶の破片が各所にばらまかれたのではないかという意見も出されています。

さて、本宿町遺跡で見つかった土偶の破片に目を向けてみましょう。破片の断面に、棒状の空洞や孔を確認できるものがあります。これは、頭・胴・足などの粘土のパーツを、木芯でつなげてつくった痕跡と考えられます。

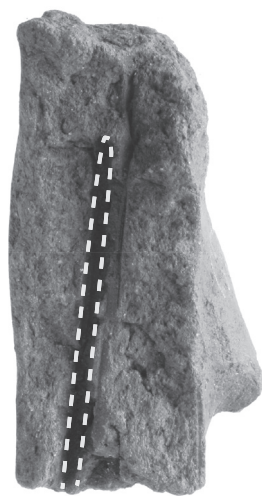


足の破片（右下は足の裏）

また、多彩な足の表現もみどころです。指がある場合、その本数は一定ではないようです。足の裏に模様をほどこしたものもあります。本宿町遺跡の土偶は、全体的に足がどっしりとつくられている印象で、こうした土偶は自立させて使っていたと推測できます。府中周辺の市でも、指が表現された足や、長さ10cmほどの大きな足の破片がみつかり、興味深いところです。

同じ遺跡からみつかった土偶でも、その造形はバラエティに富み、各土偶にこだわりのポイントがあったようです。当館の常設展示室では、なるべく多方向から土偶がみえるように展示しています。小さな破片も1点1点にみどころがありますので、いろいろな角度から観察して頂けると嬉しいです。そして、土偶をつくること、使うことが縄文時代にどのような意味を持っていたのか、ぜひ考えてみてください。（石澤茉衣子）

※掲載資料はすべて府中市教育委員会蔵



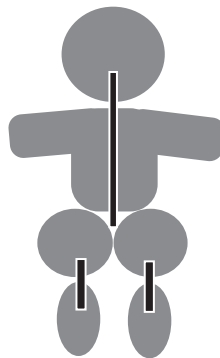
縦に割れた胴部の破片



胴部の破片（上から）



でん部の破片（下から）



● 粘土のパーツ  
| 木芯

割れ口に空洞や孔が確認できる破片（点線部分）と木芯を使ったつくり方のイメージ図

# 謎の窪みをもつ

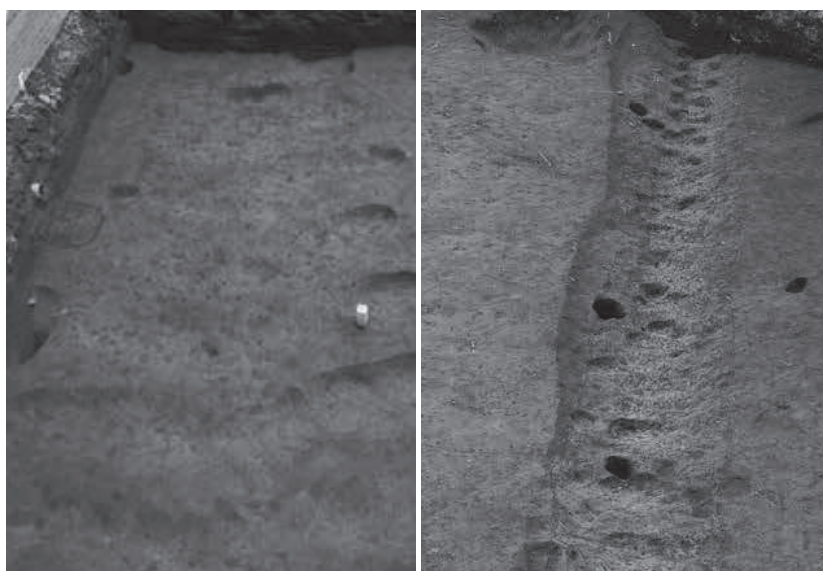
## 古代道路遺構

寿町三丁目・緑町一丁目

府中市ふるさと文化財課

湯瀬

禎彦



道路 A

道路 B

今回は、近年、古代武蔵国府跡の発掘調査で発見された二つの道路遺構（道路 A・B）を紹介します。道路 A は寿町 3 丁目の府中街道沿いの西側、道路 B は緑町 1 丁目の甲州街道北側で発見されました。

道路 A は約 3 m 幅の南北道路です。長さ約 8 m が確認され、路面には波板状凹凸面と呼ばれる連続した横長の窪みがあります。この窪みには古代の土器や瓦の小片が多数含まれ、覆土下層は硬くなっていました。

道路 B は約 2.5 m 幅で南西 - 北東に斜行する道路です。長さ約 26 m が確認され、溝状に窪んだ底面には等間隔に連続した小穴があります。小穴の覆土は硬く締まっていた。

道路遺構に波板状凹凸面や連続した小穴が伴った事例は、これまでに古代武蔵国府跡で複数確認され、全国的にも珍しいものではありません。波板状凹凸面については、重量物をソリで運搬するため路面に丸太を枕木として据えた痕跡とする説や、道路の地盤をより強くするために突き固めた痕跡とする説、人を介して牛馬が永年歩いた痕跡とする説などが提示されています。しかし、いずれの説にも賛否があり、波板状凹凸面が何に起因するものかは謎となっています。

こうした諸説を踏まえ、道路 A・B の特徴を改めてみると、道路 A は波板状凹凸面に含まれた多くの遺物の破片と硬い土層が地盤を補強した痕跡ともみられますが、当初はそこに枕木が据えられていた可能性もあります。一方の道路 B については、等間隔に連続した小穴が牛馬歩行の痕跡ともみられます。しかし、牛馬がこれだけ整然とした歩行の痕跡を残すためには、この場所で長期にわたる歩行の統制があったと考えるべきで、その目的が大きな問題ともなります。

このように、道路 A・B は謎の窪みをもつ道路遺構ですが、謎の解明にはまだ多くの検討を積み重ねる必要があるでしょう。



道路 A 路面



1942年、府中行在所の修繕工事竣工式に記念品として配られた絵葉書

府中市郷土の森博物館の園内には、市内各所にあった歴史的な建築物8棟を移築・復元しています。今回ご紹介するのは、そのうちの一つ、旧田中家住宅にまつわるお話です。

旧田中家住宅は、旧甲州街道に面して建てられていました。当家は江戸後期から明治にかけて府中を代表する大店でした。家の造りも大規模で、商いをする表店の間口は6間（約10.8m）、敷地全体の間口は9.5間（約17.3m）もあります。瓦葺きの表門や家格の高い家にある式台付きの玄関も備えています。

#### ▼ 田中家の来歴とその商売

田中家は元々車返村（現 白糸台）に住んでいましたが、江戸時代後期の1790年（寛政2）には府中新宿（現 宮町）で商売を営んでいたようです。史料によると、1838年（天保9）には穀物や荒物、酒、反物等を扱っており、1843年ころには旅籠屋も営むようになりました。

代々三四郎を名乗ることが多く、屋号を柏屋としました。ちなみに「神社のそばで柏手を打って末長く御加護を受け栄えるように、又、柏のように枯れずに栄えるように」と命名したようです。

田中家は、1800年代初頭には村方三役の一つである百姓代に名を連ね、その後組頭となり、

明治時代には駅用掛を勤めました。

他地域から移住してきた当家がこれらの役職についたのは、商売によって築いた経済的な豊かさが一因だと思われます。

#### ▼ 明治天皇の巡幸・行幸と行在所

明治時代の初期から、天皇が各地をまわる巡幸や、兔狩り等で特定の場所を訪れる行幸がしばしば行われました。それは、民衆に能動的な天皇の姿を示すとともに、新たな政府の樹立を伝えるためのものでもありました。その際に天皇が宿泊したり、昼食をとったりした場所を行在所といいます。

宮内庁には巡幸や行幸に伴い作成された行程図や略地図等が保管されています。1878年（明治11）に作られた神奈川県管内の沿道略図には、昼食の場所として「田中三四郎」家の名前が記されています（次頁右図矢印部分）。同年には多摩地域を巡幸していないため、この図は1880年の山梨・三重・京都巡幸のために準備されたものだと考えられます。当時、明治天皇の行在所の多くは地域の名望家があてられており、府中で裕福かつ社会的地位もあった田中家に白羽の矢が立ったのだと思われます。

1880年6月16日、明治天皇はこの行程図の

通りに府中を訪れ、大國魂神社と行在所になった田中家へ立ち寄っています。田中家には、その1か月前に宮内省の小書記から通告があったようです。1940年（昭和15）に巡幸の様子を対談形式で振り返る回顧録が作成されました。それによると田中家では通告の翌日から植木の手入れや鉢物の飾り付け、畳の新調をしたとあります。明治天皇を迎える当日の様子も語られており、椿の葉でアーチを作って小さな金の玉を飾る等の様々な装飾を施したようです。

その後、連光寺村（現 多摩市）での兎狩りや多摩川での鮎魚の天覧を目的とした行幸が1884年までに6度行われ、その度に田中家が明治天皇の行在所となりました。

### ▼ 史蹟となった田中家

1919年（大正8）に「史蹟名勝天然紀念物保存法」が施行され、各地で様々なものが文化財として保護の対象となりました。1933年には、明治天皇が訪れた場所や建造物等108件が聖蹟として国の史蹟に指定されます。その背景には、明治天皇を神聖化することにより、天皇制を強化するという目的がありました。

田中家もこの時、「府中行在所」として史蹟に指定されます。1940年、府中町は紀元2600年記念事業として建物の改修に着手し、翌年にはその土地と建物を買ひ受け、町有財産としました。竣工式が行われたのは、改修から2年後の1942年。その時、記念品として配られたのが、冒頭の絵葉書です。

ところで、1880年の明治天皇巡幸に伴い宮内省が作成した屋敷の図面と、1936年に文部省が史蹟を調査した際の図面を比べてみると、御座所の位置が違ってきます。おそらく史蹟に指定されたことをうけ、庭から参観しやすい位置に移動したものだと考えられます。

### ▼ 史蹟指定解除とその後の府中行在所

明治天皇の聖蹟は1933年からわずか5年の間に全国各地で377件が史蹟に指定されます。しかし、終戦後の1945年に連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の指導により、その全てが指定を解除されます。史蹟ではなくなった明治天皇の聖蹟は解体の憂き目にあい、史蹟であったことを示す石柱を残すのみという場所は少なくありません。



1878年「御巡幸沿道神奈川県管内略図」部分  
（宮内庁宮内公文書館所蔵）

解除後の府中行在所は、その一部が府中町の図書室となったり、市政施行の折には会議所として使われたりしました。しかし、そうした活用も長続きせず、1960年代後半には、天皇が宿泊した御座所を除いて取り壊されてしまいます。

その後、郷土の森（現 郷土の森博物館）を建設する構想が1970年代後半に立ち上がると、園内に移築する建築物の候補の一つに府中行在所があがりました。1982年に府中駅南口の再開発が計画されると、その翌年に御座所の解体工事が行われ、1986年には発掘調査を実施し、取り壊された屋敷について様々なことが判明しました。その調査成果や宮内庁に残されていた図面、写真資料等によって、旧田中家が明治天皇巡幸時の姿で当館の園内に復元されたのは、1989年（平成元）のことです。

史蹟ではなくなった明治天皇聖蹟の多くが消失したなか、復元された旧田中住宅は当時の建物の景観を実際に見ることのできる場所として貴重だといえます。こうした歴史を知っていただくために、当館では7月22日（土）から旧田中家住宅を会場に復元建築物展示「行在所になった府中の大店」を開催します。店先に掲げられていた看板や、当時使用されていた大釜等を展示いたしますので、ぜひご観覧ください。

特別展



7/15 (土) ~ 8/27 (日)

会場：本館 1 階特別展示室

この夏、郷土の森博物館で縄文時代と一緒に探ってみませんか？

本展示会では、多摩地域を中心に、東京 23 区や神奈川県の遺跡でみつかった縄文時代の資料を展示します。多くの機関のご協力により、縄文時代のくらしを物語る貴重な資料が一堂に会することとなりました。具体的には、縄文時代の人びとが使った道具、食糧としていた森や海のめぐみ、身につけた装飾品などです。これらの資料をもとに、縄文時代の調査・研究の成果の一端をご紹介します。当時のくらしおよび生きた人びとに焦点をあて、縄文時代がどのような時代だったのか考える機会にしたいと思います。

わたしたちが縄文時代と呼んでいるのは、今からだいたい 16,000 ~ 2,300 年前。その時代像については、長きにわたる発掘調査および研究の深化によって、新たな見方が次々と提示されています。これまで大勢を占めていた学説が見直されることもあります。

こうした調査・研究により、縄文時代のくらしは、気候や植生、資源の選択・確保、加工技術などと密接に関わっていたことが明らかになってきました。これらの観点から、本展示会では、狩りにおける工夫、多彩な植物の利用、海産物の加工、細かな造形技術などを具体的に物語る資料をご紹介します。なかには、黒曜石やヒスイなどの産地が限られる材料を使った製品もありますので、注目して頂きたいです。

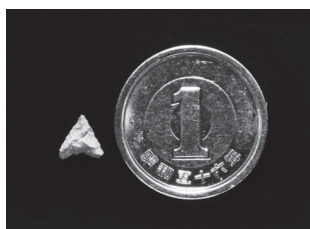
なぜつくられたのか、どのように使われたのか不明な資料も多いのが縄文時代。研究が進化したからこそ、新たに浮上した論点もあります。そのようなナゾの部分についても、あわせてご紹介します。みなさんの考えを投票して頂くコーナーもあります。現段階での学説もヒントにしながから、ぜひ参加してみてください。

なお、府中市内の資料としては、武蔵台、清水が丘、本宿町の各エリアでみつかったものを主に展示します。ふだんは収蔵庫で保管していて、

近年の研究で注目された資料もお目見えします。さらに、府中市内の遺跡で出土し、現在は市外機関で保管されている資料の里帰り展示も予定しています。

本展示会は、子どものみなさんを対象とした構成にしていますが、もちろん大人のかたのご来場も大歓迎です。「これはなに？」「なぜ？」など、自由な意見・感想を持ちながらご観覧ください。展示資料をじっくりみたあと、「どんなもんだい？ 縄文時代」という問いに対して、みなさんそれぞれの答えを導いて頂ければ幸いです。

(石澤茉衣子)



ちいさな石の矢じり  
(武蔵台遺跡出土)



石斧が 6 つおさめられていた土器 (武蔵台遺跡出土)  
土器のかげらで蓋をし、地中に埋められていた。

## 企画展 田村智久写真展 花の森八景第2章 ヒカリトワ

6/3 (土) ~ 8/27 (日)

会場：本館2階企画展示室

本企画展は、府中市郷土の森博物館の園内で四季折々に咲く花や風景に魅せられ、10年以上にわたって撮影を続けた写真家の故・田村智久氏の写真展第2弾です。

田村氏は商業カメラマンとして活動していましたが、2001年に若年性パーキンソン病を発病し、仕事としての撮影活動を一度断念します。しかし、数年後に治療の一環として撮影を再開し、それからは居住地である府中の身近な光景をカメラにおさめるようになりました。なかでも熱心に通ったのが、ここ府中市郷土の森博物館でした。

当館園内には様々な植物があり、季節によって異なる姿をみることができます。田村氏はそうした園内の千変万化する一瞬を追い続けました。その時々にはしかみることのできない姿を切り取った作品たちは、2018年に当館で開催した写真展『花の森八景-萌えさかる花たちを謳う』において、広く人びとの目に触れることになりました。

2022年には、Mitten府中で同写真展を開催し好評を得ました。その最中に田村氏は病に倒れ帰らぬ人となってしまいましたが、当館での2回目の写真展を待望していた田村氏の遺志を継ぎ、生前から支えた人たちと協力して本企画展を開催するにいたりました。

生前、田村氏は「ブラッシュアップ・ライフ」(写真右上)という作品を特に気に入っていました。この1枚は2020年の緊急事態宣言が解除され、外出自粛が緩和されたところに撮られたものです。それまで田村氏は咲き誇る睡蓮を好んで撮影していました。しかし、当時の先が見えない雰囲気から“これから”や“未来”を予感させる咲き始めそうな蕾こそ、この時代にふさわしいと話していたそうです。

写真は“光”の芸術であると考えていた田村氏は、“光”をとらえることを強く意識し、自分が

感じた美しいと思う姿をそのまま映すことを信条としていました。例えば、「豊穰の海」(写真下)という作品は、夕陽をバックにねこじゃらしの穂の柔らかさが表現されています。このように被写体を美しくみせる光を見極め、真正面からその光をつかみ、それを永遠のものにする。そうした田村氏の作品に込められた想いが、本企画展のテーマになっています。

「写真を撮ることで最も重要なことは、撮影して満足するのではなく、撮影したものを作品として世の中に出し、それをみんなで分かち合うこと」とおっしゃっていた、田村氏の美しく魅力的な作品を心ゆくまでご鑑賞ください。(荒一能)



ブラッシュアップ・ライフ～睡蓮



豊穰の海～ねこやなぎ

## series みち～道・路・通～

### ①水の路が緑の道へ

府中市南部の大半は、江戸時代以前から水田地帯でした。その面積は減少していますが、今でも田園風景を見ることができ、用水路が網の目のように広がっています。

府中を流れる用水路は、江戸時代後期には多摩川沿いに上流から府中用水（国立市青柳）、本宿用水（同泉）、四谷用水（上堰・下堰の2か所：府中市四谷）、三か村用水（同是政）の5か所の取水口がありました。当時は水田が多く、水もたっぷり必要でした。

その後、多摩川の水を飲み水として利用する目的で、1927年（昭和2）に村山貯水池が、1934年に山口貯水池ができました。また1957年には多摩川上流に小河内ダム（奥多摩湖）ができました。これらの結果、多摩川の水量は激減しましたが、一部の用水路では取水が困難となりました。さらに、1960年代以降には市域が宅地化され、徐々に水田は減少していきました。

こうした事情が重なり、四谷用水は2か所からの取水をやめて本宿用水と合併し「西府用水」となりました。そして旧本宿用水の取水口を共同利用しています。現在、多摩川堤防には四谷用水取水口のの水門施設が残されていますが、そこより標高がかなり低い場所を多摩川の水が流れており、取水は困難です。三か村用水も現在は取水口がなくなっており、府中を流れる用水路としては府中用水と西府用水が取水を続けています。なお、現在では地下水を機械でくみ上げて利用する技術も発達し、市内には排水路さえあれば耕作できる水田もあります。2か所の取水でも、府中の農業用水はまかなえる状況なのです。

この状況から、府中市では水だけの通り道だった用水路を、一部暗渠化したり水路と並行して歩ける道をつくったりして複合的に活用する試みがなされます。その結果「市川緑道」、「新田川緑道」など、現在も用水路としての機能を兼ね備えた緑道が市内にいくつも整備されています。



1936年（昭和11）につくられた四谷下堰の水門跡

さらに緑道は自然を保護する拠点になっている一面もあります。取水をやめた四谷用水下堰からはじまる用水路跡地には、1977年建立の「西府用水下堰水門之跡」記念碑を起点とした緑道があり、周辺は「四谷下堰緑地」として整備されています。全長400m程度の緑道を中心に、里山のような樹林もあり、現在では市民ボランティア団体によって植樹やヒガンバナなどの植付け、除草や清掃といった環境保全が行われ、人びとの憩いの場になっています。もちろん川からの取水はなくても、雨水などの排水路としての機能は残っており、緑地を出て暗渠になっている水路跡をたどれば、西府用水の取水口を起点とする用水路と合流し、現役の水田やほかの緑道にも行きます。

このような用水路起源の緑道は、ほとんどが1970年代以降、まちづくりの一環として整備された「古くて新しいみち」です。かつて広がっていた田園風景を想像しながら歩いてみるのも面白いかもしれませんね。  
(佐藤智敬)



整備された四谷下堰緑地



令和4年度  
寄贈資料一覧

No.	寄贈者 (敬称略)	資料名	分類	数量
1	秋元 良夫	中村克昌書	歴史	4点
2	平岡 正之	京王・井の頭線記念メダル	歴史	1点
3	甲坂 和也	府中町発展寿語録	歴史	1点
4	中村 次郎	大國魂神社百分之一図	歴史	1点
5	高橋 隆則	1964年東京オリンピック聖火ランナー関係資料	民俗	6点
6	高木 秀男	1964年東京オリンピック聖火ランナー関係資料	民俗	3点
7	中村 次郎	白丁・手ぬぐい・パズルなど	民俗	59点
8	石川 裕三	民俗資料 など	民俗	一括
9	甲坂 和也	5つ玉そろばん	民俗	1点
10	加藤 良男	お札・電子ジャー など	民俗	12点

※令和4年度の寄託はありませんでした

資料をご寄贈ください！

博物館では、府中に関わる資料を集めています。  
博物館に寄贈しても良いという方がいらっしゃいましたら、ご一報ください。

昭和40年代以前の家電製品／府中にかかわる古写真／養蚕や信仰にかかわる資料／府中で出土した土器や石器など



「あるむせお」は当館HPで閲覧できます！

No.1～最新号までをPDFで掲載しています。

※「あるむせお」の定期購読をご希望の方は、1年分の送料400円（切手でも可）を添えて、ミュージアムショップ受付カウンターでお申込みください。

令和4年度  
利用状況

区分	有料		減免 (障害者・ 4歳未満等)	合計	
	一般	団体			
博物館観覧者 開館日数 304日	大人	179,428	1,790	61,892	243,110
	子供	29,075	9,489	68,773	107,337
	小計	208,503	11,279	130,665	350,447
上記のうち プラネタリウム観覧者 投映日数 304日	大人	31,456	1,196	6,925	39,577
	子供	16,508	7,667	5,797	29,972
	小計	47,964	8,863	12,722	69,549

新刊案内

＊『府中市郷土の森博物館紀要』36号 400円  
学芸員他による研究報告・論文集です。

- ・府中市西部地域の古代集落 [湯瀬禎彦]
- ・〈資料紹介〉「国分寺北院」採集の灰釉陶器 [石澤茉衣子]
- ・近世後期の神社における神仏関係  
一府中六所宮を事例に一 [小林優里]
- ・〈資料紹介〉屋根裏のお札群(二)  
一上染屋 宮沢家発見資料より一 [佐藤智敬]
- ・〈資料紹介〉根岸武香収集拓本コレクション  
[深澤靖幸]

＊府中市郷土の森博物館ブックレット24  
『代官 川崎平右衛門と武蔵野新田』 500円



江戸時代中期に、押立村(押立町)の名主から代官になった川崎平右衛門。8代將軍吉宗や大岡越前守忠相に高く評価されたその業績を、武蔵野新田の経営の立直しを軸に紹介します。

成功の秘訣は人心掌握?!

8代將軍吉宗の時代に、押立村の名主から旗本になった人物がいた！大岡忠相にも認められた才能とは？その半生を紐解く一冊。

※新刊は、本館1階ミュージアムショップにて発売中です

## 近代フラネタリウム誕生 100 周年！

# フラネタリウムについて知ろう！



### ①世界初の光学式フラネタリウムの誕生

ここ数年、天文・宇宙関係の様々な周年が続いています。例えば、2019 年は人類初の月面着陸から 50 周年、2020 年はハッブル宇宙望遠鏡の打上げから 30 周年、2021 年は世界初の有人宇宙飛行から 60 周年、2022 年は現在も使われている 88 星座が制定されて 100 周年でした。そして、2023 年は光学式フラネタリウムが誕生し 100 周年にあたります。本シリーズでは、この 100 周年に合わせ、光学式フラネタリウムについて様々なことをご紹介します。第 1 回目は、光学式フラネタリウムが誕生した経緯についてです。

光学式フラネタリウムの開発は、1913 年にドイツ博物館の初代館長オスカー・フォン・ミラーが、室内に恒星や惑星の動きを再現する展示を希望したことにより、始まりました。この展示については、ハイデルベルグ天文台の天文学者マックス・ヴォルフと相談し進められ、その開発はドイツのイエナにあるツァイス社に依頼することとなりました。

オスカーとマックスは話し合い、この天体の動きを再現する展示について、2つの希望を出しました。一つは、天体の動きを短い時間で再現できること。もう一つは、天体を電気で動かし、光らせることでした。

この2つの希望を実現するために考え出されたアイデアは、半球状のドームを空に見立てて恒星と同じ位置に穴を開け、ドームの中からは、星が輝いているように見えるというものでした。ドーム自体を回転させることで恒星の動きを再現し、恒星とは異なる動きに見える太陽系の天体の動きを再現するための機構を、ドーム内部に設置しようと考えました。しかし、このアイデアには、いくつか問題がありました。それは、ドームをあまり大きくできないため、少人数しか入れないということ。さらに、複雑

な動きをして見える太陽系の天体の動きを再現するのが困難であるということです。

これらの問題を解決したのは、ツァイス社の技師ヴァルター・パウアースフェルトでした。彼の出したアイデアは、光源を用いて、恒星や惑星をドームに投映するという画期的なものでした。ドーム自体には加工をしないので、より大きくして多くの人を収容できるように、また投映機はドームの中央の一つにまとめて設置し、実際の星の運動と一致するような機構にするようにと考えました。ヴァルターは、このアイデアを実現させるために、600 枚以上のメモで、天体の動きや機構などを計算し、地球から見た星の動きを再現できる光学式フラネタリウムの構想をまとめました。そしてついに、1923 年 8 月、世界初の光学式フラネタリウム「ツァイス I 型」が誕生したのです。

現在では、光学式フラネタリウムとデジタルフラネタリウムを併用することが多くなりましたが、日本だけでも 300 台近くの光学式フラネタリウムが活躍しています。光学式フラネタリウム 100 周年となる今年に、各地のフラネタリウムを巡ってみてはいかがでしょうか？

(村井太一)



ツァイス I 型のフラネタリウム投映機

Photo.Courtesy of ZEISS,Deutsches Museum